

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | W・ W・ ロストウ著 木村健康・ 久保まち子・ 村上泰亮共訳 経済成長の諸段階  |
| Sub Title        |   |
| Author           | 富田, 重夫  |
| Publisher        | 慶應義塾経済学会  |
| Publication year | 1961  |
| Jtitle           | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.9 (1961. 9) ,p.837(105)- 838(106)  |
| JaLC DOI         | 10.14991/001.19610901-0106  |
| Abstract         |   |
| Notes            | 新刊紹介  |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610901-0106">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610901-0106</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヘスを研究することは、ヘスの存在意義をもそのような限定された観点の中で考えることになりやすく、山中氏の場合のように否定的な答えがでたとき、ヘスの存在意義、あるいは研究意義はまた、さらに別の所にもとめられねばならないのである。かくて、ヘスとマルクスの疎外概念の対比という限られた視点の中でのみ、ヘスをみることに問題はあり、初期社会主義者ヘス、という更に広い視野

をもたねばならないことは明らかであるとしても、しかも本書の著者のように、そのような問題視点をまったく持っていないことは、本書にとって大きな欠陥であることは否めない。著者は、マルクスにおいて、疎外概念の発展が、彼をして科学的な社会主義者たらしめる媒介者となったのだ、という認識すら欠けているのではなからうか。

### 新刊紹介

#### 講座・国際経済・第2巻

#### 『国際収支』

国際収支は国際経済学のみならずはよく開拓された分野であり、国際経済についてのテキスト・ブックにはかならず取り扱われている。国際収支についての単行本としても、土屋六郎著『経済成長と国際収支』中央経済社がある。本書は有斐閣が企画した『講座・国際経済』全6巻のうちの第一回配本として出された第2巻である。これを土屋氏の前掲書と比較すると、次のような特色がみられる。土屋氏が「経済成長」に統一的観点をおき、国際収支の理論的分析を主眼とされているのに対し、本書は国際収支についての歴史、理論、政策、現状分析を、専門別に九人の筆者が担当している。現実に生起している国際経済の諸現象を理解するため、その歴史と理論と現状とを体系的に、かつやさしく解

明する、というのが講座全体としての狙いであり、本書の、序説、国際収支と国際協調、I 金本位制の理論と歴史、II 国際収支論、III 国際収支の現状分析、国際収支セミナー、という章構成もこの趣旨に沿っている。ただし、とくに理論の部分はあまり「やさしく」ないかもしれない。

国際収支理論はいわば技術論であるから、執筆者によって意見がくいちがうということはない。しかし理論部分と、問題と文献を取り扱った「国際収支セミナー」、さらに現状分析を担当した人も、多少は理論に触れているので、これらの間に意見がくいちがわないまでも、重複していると思われる箇所があり、その場合説明の仕方もいくらかは違っている。これが「体系的」ということについての難点である。

講座全体のもう一つの狙いである、「国際経済事典の役割」を本書に果させるためには、巻末に事項索引が必要であろう。

本書が第一回配本であり、他の巻は未だ刊行されていないので、講座全体の批評はできないが、本書だけについていえば、国際収支

の理論と歴史についてはすでに書かれたものも多いので、ドル危機、貿易の自由化など最新の問題についての現状分析に興味が見出される。学生諸君にとっては国際収支についての入門書としても利用できると思われる。(有斐閣刊・A5・二四九頁・四五〇円)

— 矢内原 勝 —

W. W. ロストウ著

木村健康・久保まち子・村上泰亮共訳

#### 『経済成長の諸段階』

W. W. Rostow, The Stages of Economic Growth. — A Non-Communist Manifesto, 1960. この原著は既にその出版以来、各国の識者の間に多大の関心を惹起してきたことは周知の通りであるが、ここにその邦訳がなされ、わが国の読書界にも更に広く親しまれようとしている。「非共産党宣言」なる公衆の耳目を魅するような副題をもつこの書には、その理論の形式的及び内容的両側面から、いろいろ興味ある特色がある。まず従来

### 新刊紹介

経済史家としてその業績を示してきた著者が『The Process of Economic Growth』

(1952)なる経済成長の歴史の理論を展開した

が、この「諸段階」の著書においても、その序文に述べているように理論と歴史の結合を試みている。経済成長についての現代の近代経済学的アプローチはもろもろ多くの成果を挙げつつあるが、その精緻なしかし抽象的な分析は、他面において印象的にも非歴史的なものを感じさせる。これに対してロストウは経済成長に関連する諸要因の経済的並びに非経済的多様性を明らかにし、又集計概念のみならず、諸部門に関する分析を重視し、極めて広範な内容を含む長期的段階理論を構成している。この理論は歴史学派的段階説の一種であるが、この理論をもつて単に経験の一般化たる経験法則とみるのではなく、そこに内的論理として生産の動学理論を導入している。それはその論理の強靱さにおいて、マルクシズムなどと比すべくもないが、これによってこの段階理論に、予測と計画への政策的意義を附与せしめていることを認めねばならない。

ロストウはこの段階理論を基として、ロシアとアメリカの成長の比較や、侵略と平和の問題に及び、さらにマルクシズムとの異同を明らかにするなど、極めて現代的な諸問題を提供している。経済が長期的、歴史的变化の重要な一要因であることを容認しながら、それが唯一の決定的要因とみることには反対し、唯物論でもなく、観念論でもなく、経験的に多様な成長要因を指摘している点において長短あわせ含むものと思われる。

最後に邦訳について一言すれば、部分的には考えすぎと思われる点もあるようであるが、「できるだけ読み易くする」という訳者の努力のあとがみられる。そしてわが国の読書界に広くこの理論が検討される機会を与えた意義は大きいと思う。(ダイヤモンド社・A5・本文二三四頁、五八〇円)

—富田重夫—

波多野善大著 『中国近代工業史の研究』

半植民地・後進国の典型として扱われ、死せる獅子にも擬せられた中国が独自の社会主義経済をおしすすめている今日、人は多くその急速な経済成長の真否、人民公社という「偉大な」、或いは「奇妙な」社会主義企業組織の是非、社会主義陣営内の経済理論をめぐる中ソのくいちがいなどに注目するが、この中国経済の変貌過程の理論的分析の最も重要な基礎の一つは、旧中国における資本主義の発達の仕事と程度の確定であろう。当時の世界資本主義市場(とくに資本輸出について)における中国の位置とそれとの関連における民族資本の発展の様態と程度の論理的説明はそれ自体として重要な研究課題であるにとどまらず、社会主義経済への移行の条件の検討としても極めて問題であるが、未だ体系的に考究されてきたとはいえない。

本書は所謂「資本主義の萌芽」ないし「商品生産の評価」をめぐる、戦後数多くのすぐれた著作とその批判によってうたてられた水準をふまえて、中国における資本主義の形成(その系譜)・近代産業の確立過程を一本としてとらえようとする力作である。アヘン戦争をはさんだ時系列の、あるいは一時点における生産構造の、極めて高い理論水準からなされる歴史家としての実証分析の確かさは、著者の長年の蓄積を背景とする位置から導き出されるものであり、研究者にとってありがたい書物である。

とくに従来鋭く論究されながら個々に考察されていたアヘン戦争以前の中国自体よりする商品生産の発展(絹・棉業)と商業・高利貸資本の存在形態を、中国独自の中央集権的官僚組織・下部組織での蓄積の様態の中で、つまり前資本主義的メカニズムの中国的構成として、体系的にとらえられたこと、アヘン戦争以後の「近代産業の成立」を「新資本の成立」としてとらえ、南京条約以後の関税無防備・治外法権成立過程で外国資本・華僑資本・近代企業の傾斜をもちうる洋務派官僚資本の交渉の中で、相互に規定され変化するものとして性格が与えられていること——それ

はすなわち中国的近代的企業資本の類型を明らかにする——それがとくに日清戦争をめぐる日本経済の維新以後における資本主義の発展と対比される条件を提供する、などに特色の一端がある。

内容は、まず第一部「事項目」において、『資本論』を中心に、マルクス経済学の諸概念が解明されている。四〇〇項目、四六五頁にわたる膨大な解説であり、関係ある原典個所もくわしく指示されている。

尚、本論の一応の展開点である上海機器織布局と外国人の工業権、更に加えられた、清末の漢陽製鉄所の設立と鉄道国有政策・鉄道利権の分析が、この時期の中国経済にいかなる意義を持つかはいうまでもないことである。

尚本書はハーバード燕京研究所の出版補助によっている。(京都大学文学部東洋史研究会発行・昭和三十六年五月一日・A5・五五六頁・一三〇〇円) —平野絢子—

久留間敏造、宇野弘蔵、他編輯 『資本論 辞典』

本辞典は、『資本論』を学ぼうとする人々の手びきとして、『資本論』における経済学上の諸概念、難解な記述、構成等を解説し、『資本論』の理解を容易にしようとしたもの

である。内容は、まず第一部「事項目」において、『資本論』を中心に、マルクス経済学の諸概念が解明されている。四〇〇項目、四六五頁にわたる膨大な解説であり、関係ある原典個所もくわしく指示されている。

第三部は、『資本論』総目次、『資本論』の構成、『資本論』の成立史、『資本論』にかかる年表、『資本論』に引用されている故事の解説、『資本論』各国語版の解題をふくんでいる。